『軍国主義という病がひそむ国　3』　　2025 年 11 月 10 日

保阪正康氏の『軍国主義という病がひそむ国』の 2021 年 8 月の講演は「あの戦争から何を学ぶのか～半藤一利さんの遺言」である。半藤氏は保阪氏より 10 歳ほど年上だが、二人は近現代史の研究者で、親しい間柄にあった。半藤氏は「大事なことはすべて『昭和史』に書いてある」と言って、次の 5 つの教訓を挙げていたという。①国民的熱狂をつくってはいけない。そのためにも言論の自由・出版の自由こそが生命である。②最大の危機において日本人は抽象的な観念論を好む。それを警戒せよ。すなわちリアリズムに徹せよ。③日本型タコツボにおける小集団主義（例・旧日本陸軍参謀本部作戦課）の弊害を常に心せよ。④国際常識の欠如に絶えず気を配るべし。⑤短兵急に成果を求める発想をやめよ。ロングレンジのものの見方を心がけよ。以上 5 つの教訓は理解、納得できる。熱狂に踊らされず、現実を直視し、国際常識で、長いスパンで物事を捉えよということであろう。また、大きな出来事には目を奪われがちだが、半藤氏は、「真理は細部に宿る」と、小さな出来事の中に真理があると言っていた。更に、「絶対に」とか「完全に」とか、軍国主義時代に使われた言葉を使わない。保阪氏は、「半藤さんは『絶対に』という言葉は使っていません。いや、あえて一つだけ使っていますね。『絶対に戦争してはいけないんだ』と。この時は『絶対に』を使うんだよ、と、本人もおっしゃっていましたね」と書いている。これが、半藤氏の遺言である。半藤氏は多くの本を著し、『日本のいちばん長い日』はベストセラーになった。私は本を読んでいないが、映画を観た。国體の維持、天皇と天皇制を守るためなら、国民はどうなっても良いとする軍人たちの狂気に圧倒された。天皇制は、まさにカルト宗教であったのである。

保阪氏は「太平洋戦争から学ぶ三つの教訓」を語っている。①文民統制が守られていなければいけない。軍部が政治、国家の政策を全て振り回し、国民の生活も振り回すようになると、軍事の価値だけが一番尊いということになり、政治が死んでしまう。②文化や伝統に反する戦争であったことである。軍事指導者たちは、戦地の兵士たちに皆、玉砕せよ、死ねと命じ、また、特別攻撃隊、特攻作戦を強行した。捕虜になることを禁じ、玉砕、特攻、集団自決という生命軽視が顕著に現れていった。これらの死の強制は日本の生と死の伝統文化に反する、異質なものであると言う。私は、靖国神社に天皇のために死んだ人だけを祀り、他の戦死者を排除するのは、日本の文化に反すると思っている。③捕虜をきちんと遇する、軍の指揮官は 100%死ねという命令などは出さない、このような国際ルールがあったにもかかわらず、日本はまったく無視した。とにかく死ねと要求した。

保阪氏は、100%死ぬ特攻を「十死零生の思想」と言っている。100%死ぬ、助かる見込みは「零」である。国力がなかったので、最後は特攻に頼るしかなかったという考えを聞くが、この戦術を選択した軍事指導者の責任は重く、それは厳しく問わなければならない。特攻隊員の手記や、遺書が残されている。表向きは「国のために死ぬ」と書いているが、「喜んで死んでいく」とは書いていない。慶応大の学生は「自由主義者として死んでいきます」と書き、京都帝大のクリスチャン学生は「お母さん、私は賛美歌を歌いながらアメリカの航空母艦にぶつかっていきます」と書き遺している。若者たちを納得できない死に追いやったのは何故か、その道程を明らかにすることが、私たちの責任であろう。

保阪氏は、「他国を攻めない。他国から攻められない形の国家としての矜持、国家としての誇りというものを、やっぱり作っていかなきゃいけない」と言う。『軍国主義という病がひそむ国』にしてならないと心から望む。